慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	カースルズ / ミラー著『移民の時代 : 現代世界の国際人口移動』
Sub Title	Stephen Castles and Mark J. Miller "The age of Migration : international population movement in the modern world"
Author	関根, 政美(Sekine, Masami)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1994
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.67, No.8 (1994. 8) ,p.149- 155
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19940828-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Stephen Castles and Mark J. Miller
The Age of Migration: International Population Movement in the Modern World
(London · Macmillan, 1993, pp 306)

カースルズ／ミラー 著
『移民の時代――現代世界の国際人口移動』
本文――二七五頁（参考文献等含んで三〇六頁）

現代・未来世界は国際人口移動の時代であるということは、日本でも今や否定するものはいない。そして、この問題を抜きにしては未来世界や国際社会については語れないということも理解されている。もっとも、一時日本に外国人労働者、とくにアジア諸国からの不熟練・短期滞在労働者を政府の政策として受け入れるか否かについての大論争が生じたことがあったが、最近はあまり議論されてはいない。労働鎖国主義を徹底することは不可能であるということが理解されたことによる可能性も考えられるが、他に理由がありそうだ。まず、一九九一年六月の入管法改正でとりあえず不熟練単純労働者は入れないとしたことや、研修制度の実施によって訓練を前提とし、帰国を雇用者の責任で保証することが決まって、当面鎖国を守ることで論争にケリがついたことが考えられる。さらに、九三年に引き続く不況と雇用情勢の悪化により、非合法滞在者としての外国人労働者の増大が停滞したことも原因であろう。しかし、いずれ経済の回復とともに雇用情勢が好転すると、外国人労働者問題は再燃する可能性がある。それは、外国人労働者問題に対しては未だに曖昧な決着しかついていないからである。いずれ再発するであろう外国人労働者問題を考えるにあたって、推薦したい本が今回紹介する『移民の時代』である。

本書は、国際人口移動問題について造詣の深い二人の著者によって執筆されたものである。著者の一人は、Stephen Castles オーストラリア・ウロンゴング大学多文化問題研究所所長である。オーストラリア生まれだが、ドイツ系移民の子供として生まれたこともありドイツで活躍し、オーストラリアに帰国するまで、the Polytechnic of Frankfurt で社会学と政治経済学を教えていた。日本で開催された外国人労働者に関するシンポ

ジウムにも出席しており、西ヨーロッパの移民・難民、外国人労働者、多文化主義問題の権威としてしられ、Bodula Kosack との共著 *Immigrant Workers and Class Structure in Western Europe* (Oxford University Press, 1973／1985) と、T. Wallace との共著 *Here for Good: Western Europe's New Ethnic Minorities* (Pluto Press, 1984) は、日本の移民・難民、外国人労働者問題研究者も数多く引用している本である。一九八〇年代に帰国後、オーストラリアの移民・難民問題、多文化主義問題について多くの著作を発表している。現在、オーストラリア政府の移民・エスニック問題評議会委員でもあり、オーストラリアの移民政策に大きな影響力をもつ。評者は、一九八九年に『マルチカルチュラル・オーストラリア』(成文堂、一九八九年) を出版したが、そのための調査では多くの援助を Castles 所長より受けたことがある。若手の研究員を配した多文化問題研究所の活動は活発であったことを思いだす。

共著者の Mark J. Miller デラウェア大学政治学準教授は、ニューヨーク移民研究センター研究員、および *International Migration Review* の編集委員を勤める移民・難民問題の専門家である。主に西ヨーロッパや米国の移民・難民問題を中心に研究しているようである。著作としては、*Foreign Workers in Western Europe: An Emerging Political Force* (1981), *Administering Guestworker Programs: Lessons from Europe* (with Phillip L. Martin), *The Unavoidable Issue: US Immigration and Refugee Policy in the 1980s* (with D. G. Papademetriou) などがある。

さて本書は、現代世界が国際移動の時代であるという前提をおいて議論を進め、現代世界の国際人口移動（移民・難民、外国人労働者）の原因やプロセスと、定住・社会統合問題について体系的に説明するものである。著者達は、「国際人口移動の世界化」、「国際人口移動の加速化」、「国際的移住者の多様化」、「国際的移住者の女性化」の四つを現代の国際移動の基本的特質と見做し、その観点から、世界中の例を引きながら多面的に国際人口移動の現状と将来に迫っている。第三世界からの国際的移住者が、移住する原因、ホスト社会での定着過程、定着後の労働・生活状況、ホスト社会への適応状況、人種・民族・エスニック関係などに焦点があたえられている。近年、日本でも各種の移民・難民、外国人労働者問題に関する著作・翻訳が出版されているが、こうした本は各地域ないしは各国別の事情紹介といった傾向が強いが、それらとは異なり本書は最も体系的で対象も広く、かつよくまとまっているという点で見逃すことはできない。また、国際社会学のテキスト・入門書としても利用できよう。とくに国際的な人口移動について熟考したいと思うものにはもってこいの書物である。内容構成は以下の通りである。

〈目次〉

一　序論
二　移民過程とエスニック・マイノリティの形成
三　一九四五年以前の国際的移住
四　一九四五年以降の先進国への移住
五　移民過程の比較研究――オーストラリアとドイツ
六　次の波――国際的移住の世界化
七　労働力としての移民とマイノリティ
八　ニューエスニシティと社会
九　移住と政治
一〇　結論――新世界無秩序時代の国際人口移動

それでは、本書について私なりに紹介していくことにしたい。本書の基本的問題意識は、先に紹介した *Here for Good: Western Europe's New Ethnic Munorities* (1984) と同じと思われる。*Here for Good* は、西ヨーロッパの外国人労働者の多くの運命を扱うものである。彼らは、短期滞在のつもりでくるが結局は帰国せずに定住し、最終的には受け入れ国に永住者として受け入れられる。だが、残念なことにホスト社会の受け入れを快く思わない人々による人種主義的な対応により、彼らは恒久的なエスニック・マイノリティとなっていくというプロセスを描くものであった。

とくに、旧植民地国あるいはそれに準ずる第三世界からの外国人労働者が、低賃金労働者として労働市場の底辺に位置づけられていく過程と、定住した外国人労働者の第二世代の社会的葛藤・苦悩と、社会上昇移動の際に生じる問題を扱うと同時に、定住化する外国人労働者に対するホスト社会からの人種差別的な反応と、それに対するエスニック・マイノリティ側からの抵抗により生じる社会対立の上に展開する政治過程が論じられている。こうした過程については、今では多くの人々が理解するに至っていると思われるが、一九八四年の時点でネオ・ナチなどの人種差別的運動の激化をも予想していたため、その当時の本としては、大変先見の明のある議論をしていたといってよい。

The Age of Migration の方は、論及対象が外国人労働者のみではなく、移民・難民、外国人労働者一般に広がると同時に、対象地域が西ヨーロッパから全世界に広がっている。さらに、移民・難民、外国人労働者の動きは、西ヨーロッパ諸国の植民地化の過程に原因があるとして、*Here for Good* よりも歴史的な記述にも力を入れている。そのため、第一章と第二章で、簡単に移民・難民、外国人労働者問題についての理論的な問題点を論じた後、本書は一九四五年以前の国際人口移動に注意を向けている。それは、現在の国際人口移動が主に、旧植民地とその宗主国との間の動きであり、決して人々の自由な判断による自由な国際移動ではなく、現代の国際人口移動は、植民地化や脱植民地化と資本主義の国際化・世界化によって規定されると同時に、資本家の利益に沿うように国際人口移動を先進

諸国の政府が、大きく規制してきたという認識を土台としているからである。そのため、移民・難民、外国人労働者は、先進国やその他のホスト諸国にかってにやってきたのだと考えがちなホスト社会の人々に警告をあたえる。

第三章で植民地時代の宗主国から植民地への国際人口移動が語られる。第四章では、一九四五年以後の植民地および旧植民地から宗主国や旧宗主国への逆の動きが語られる。つまり、第三世界から先進諸国への動きである。ここで、本書は移民・難民制度であろうと、外国人労働者制度であろうと、こうした移住者を受け入れるホスト国は、基本的に低賃金労働者の調達を第一義としており、移住者の大半は移住後も生活が厳しいということを指摘する(移住労働者の周辺化)。このことを明らかにするために、永住者中心の移民国であるとしながらも、低賃金労働永住者の移住に力を入れたオーストラリアと、移民国ではないとしながらも低賃金外国人労働者を導入したドイツという対照的なホスト国の比較がなされ、両者の類似点が指摘される(第五章)。オーストラリアをラッキー・カントリー(評者はこれを太平天国と訳したい)と思う人々には耳の痛い話であり、さらに、移民国のオーストラリアと非移民国ドイツの比較に驚きと疑問を感じるものは、多分、移民国と非移民国の比較は役に立たないという誤った先入見に囚われているからである、本章を読むとそれが間違いであることに気づくであろう。

第六章では、一九八〇年代になると、低賃金労働者の調達は宗主国・旧植民地間の動きだけではなく、第三世界と先進諸国との間、あるいは第三世界の間での人口の複雑な動きとなり、資本主義の世界化に従って、国際人口移動のグローバル化が進むと論じられる。さらに、移動パターンの多様化のなかで、*Here for Good*が明らかにしたように、外国人労働者という短期的な移住者でさえも、その多くが結局は定着してしまうので、ホスト国は移住者を移住者としていつまでもみていることはできず、必ず永住者とみなして本格的に社会統合策を考える必要が生じ、さもないと不安定な人種・エスニック紛争が発生することが明らかにされる。つまり、移住者を低賃金労働者として処遇し続けることは移住者の間に不満を生み、それが彼らを結束させる原因とみている。こうして、いわゆるエスニック集団、つまり、エスニック・マイノリティが発生するのである。

第七章と第八章で移住者の大半が低賃金、不熟練労働者として位置づけられる状況と、彼らが特定の職業・社会経済的地位に押し込められること、また、マイノリティとして社会から差別されることによって、エスニック・マイノリティ集団を形成していく過程が、世界のあちこちに生じていることを、多様な例を示しながら明らかにされる。地域的あるいは社会的地位においてもある特定のポジションにおかれた国際的移住者は、本国にいた時はあまり意識しなかった文化・言語的同質性と同胞意識を、ホスト社会で差別されることにより強く感じることによって、エスニシティ(ニューエスニシティ)が意識され、エ

スニック・マイノリティが形成されるのである。

最終的には、移住者を受け入れた国は、定住しエスニック・マイノリティ化する移住者の定住化と、その社会統合を本格的に考えなければならなくなるが、その際に、どのような人種・民族・エスニック対策が利用されるかが大いに政治的論議を呼ぶことになる。これが第九章のメインテーマとなる。そこでは、人種差別的な排他主義を訴える極右から、多文化主義的な対応を求める動きなど様々な動きがみられるとともに、世界の移住者受け入れ国の政治体制によっても統合政策が異なることが明らかにされる。しかし、現在の移住者は定住者であり、かつ、おとなしく同化政策や二流市民としての地位に甘んじることはないために、結局、受け入れ国の政府は多かれ少なかれ多文化主義的な対応と、マイノリティの社会参加のために積極的な努力（差別の撤廃と労働市場参加のための特別プログラムの実施）をしなければならないと論じる。著者の一人、Castlesは、一九八六年に'The guest-worker in western Europe:an obituary'(*International Migration Review*)を発表し、ヨーロッパにおける外国人労働者問題は完全に定住者問題となったと主張しているが、もはや、外国人労働者問題ではなく彼らの社会統合こそ問題となるという視点が、本書にも生きていることに注意したい。

もし、従来のように移住者を低賃金労働者、社会のアウトカースト、エスニック・マイノリティのままにしておけば、世界各国は移住者により多民族・多文化社会化しているのだから、かくして世界中の国民国家は社会不安を増大するであろう。また、経済統合の進む現代世界では、国民国家は国際人口移動に巻き込まれざるを得ないのだから、世界の国々が不安定となるに違いない。つまり、今後、人種・民族・エスニック問題が各地で発生し、従来通りの対策では冷戦後に新世界秩序が登場するのではなく、新世界無秩序が登場することになると本書は論じている。この点では、一九九二年に'*The New World Disorder*'(『世界』九三年九月号参照)を発表して、民族問題の今後の展開を予測するB・アンダーソンと同じ問題意識をもっていることが判明する。さらに、こうした議論のなかで著者達は、ジェンダーの問題についても論じ、国際人口移動に女性が増加すると、女性差別問題も加わり、マイノリティ問題は複雑になることを指摘する。

第一〇章では、今までの議論のまとめである。基本的には資本主義の世界化は続き、今後も国際人口移動は拡大すると思われるため、とくに、低賃金労働者の第三世界からの先進国への動きは強まるであろうと警告する。この移動圧力を弱めるには先進諸国による第三世界への援助が拡大し、第三世界における職の創出が必要だと考えられるが、著者達は、現在の資本主義体制下では多国籍企業による新植民地主義の動きもみられるため、これはユートピア的解決手段であろうとする。基本的には、異文化・異言語の人々を先進諸国は受け入れて、彼らを多文化

主義のもとで社会統合していくことが、当面はもっとも望ましいのではないかと結論する。それは、貧困な地帯からくる人々に対する世界的レベルでの所得配分の方法としては、最も適切で現実的な手段であり、新世界無秩序を防ぐ手段となると考えられるからである。

本書は、以上のように現代の国際人口移動の歴史的な動向、およびヨーロッパだけではない世界的な視野から多角的に移民・難民、外国人労働者問題を論じているが、*Here for Good* に比較して、多少、論述の対象やその対象期間が広がったため、教科書的で平板な記述になっているし、実際、教科書的すぎるかもしれない。さらに、前書に比べ多文化主義による社会統合に、大きな希望をみている点でかなり楽観的であると思われる。多分、著者の一人 Castles 所長が、*Here for Good* を書いた後にオーストラリアに帰国してから、オーストラリアの中庸で健全な多文化主義の発展に、ある程度期待を抱くことができたからと思われる。

残念ながら、日本では多文化主義の極端で分離主義的な動きが近年紹介されたり、あるいは、多文化主義は多国籍企業による国際的労働市場形成のための詭弁的言説にすぎないという疑問も表明されており、多文化主義に対する懸念が強まっているが、他方、国際人口移動の高まりのなかで、かつての人種差別や強制同化主義への回帰が不可能なことも確かであることを考えると、安易な多文化主義の否定は危険なことと思われる（評者自身は、多様な多文化主義の類型の存在を想定し、中庸なものの導入を考えている。この点については拙著『エスニシティの政治社会学』名古屋大学出版会、一九九四年、とくに第七章を参照されたい）。

残念ながら、本書では具体的な多文化主義あるいは多文化主義政策について十分論じられていない。そのため、多文化主義に懸念をもつ人々には、不満を残すものとなっている。また、長い経験をもつ移民・難民、外国人労働者問題研究者による、具体的な多文化主義論を聞きたかったものにも不満が残るかもしれない。しかし、国際人口移動の展開が多文化主義をなんらかの形で必要不可欠なものとすること、すなわち、読者が懸念して反対する前に、まず、多文化主義について熟考せざるを得ない世界情勢を理解するよう要請することに本書の主眼があると考えるならば、その目的は十分達成されていると思われる。確かに著者達は、本書第二章で移住者が永住者になる過程（移住過程の四段階モデル）を論じて、新しい社会統合政策の必要性があると論じるものの、国民国家の政治体制（政治体制の四モデル）の違いによって対応も異なってくるとしている。しかしそれでも、今後、多文化主義を簡単に否定できるかというと、そうではないという点は明確にできたといえよう。本書は、教科書的なスタイルをとっているが、逆にそのためにいわんとすることは明確になったと同時に、その論証のための例は豊富で、

さすがに長年にわたり移民・難民、外国人労働者問題研究に携わってきた著者達の書物であるという感想をもてる。

さらに、本書には、従来、国際的人口移動と人種・エスニック問題が別々に論じられる傾向がある点を反省し、なんとか双方の問題を統合的に考えられないかという視点がみられる。これは、外国人労働者を受け入れるか否かの問題を議論している間に、既に多くの定住外国人が発生して、人種・民族・エスニック問題がホスト社会に発生しているように、国際人口移動を完全に国家がコントロールすることはできないのだから、そうした人々が国民となっても、周辺的マイノリティとして位置づけられないよう努力する必要があるという、国際人口移動の宿命論を受けて入れているからである。むしろ、宿命論というよりは積極的に国際人口移動が生じて、それが世界的にみて人々の福祉の増進と平準化に向かうことを期待しているようである。無制約な受入論を勧めることが本書の目的ではないし、受入に慎重な立場にも理解を示すが、日本でもこのように世界的視点から国際人口移動論ができるようになるとよいと思われる。

関根　政美